佳作

障がい者の人権問題

松江市立第三中学校　1年　楢木美結

以前、障がい者福祉施設で暮らしている障がい者達が殺されてしまった事件がありました。その事件の犯人は「意思疎通のとれない障がい者は安楽死させるべきだ。」と考えて殺したそうです。私はこの事件に対して、障がい者は差別される存在ではないと強い怒りを感じました。

私には、障がいのある姉がいます。見た目は普通だけれど脳に障がいがあり、健常者と同じ生活はできません。でも優しくて、私が困ったときには慰めてくれたりします。母はいつも姉のお世話をしています。私はそれを見てとても大変そうだと思うが不幸には見えません。私の姉は今、障がい者が働くことができる施設で頑張って働いています。自分から進んで行動したり、いつも元気にあいさつをしているのでみんなからも頼りにされているそうです。姉の周りの障がいのある人達は周りの人に支えられながら生活しているけれど、周りの人達は確かに障がいのある人のお世話をすることはとても難しいことだし、大変そうに見えます。でも、嫌々そのことをしているようには見えません。私は障がいのある人達のお世話をすることは、目が悪い人が眼鏡をかけたり、手や足をけがした人が松葉杖を使ったりエレベーターを使ったりすることと同じことだと思います。私も目がとても悪いので眼鏡をかけていて、眼鏡がないとほとんど何も見えないので生活しづらいです。障がいのある人達もそのことと同じで助けや支えがないと生活できません。そのことは当たり前のことだと思います。なので、障がいのある人達は私が眼鏡がないと生活しづらいことと少し似ていることだと想像してみると、障がいがあるということはとても生活しづらいと思いました。けれど、障がいのある人達も元気に楽しく生活しているし、周りの人達も笑顔にしてくれていて、障がいのあることは悪いことではないと思います。私は、障がいのある人達が行っている学校のお祭りに行ったことがあります。障がいのある人達は、劇や演奏をしたり、お店を開いたりしていて、ダンスや演奏はとても上手で印象に残りました。私が特に印象に残った演奏は歌を手話で表している演奏でした。手話はとても難しいのにスムーズに演奏していてとても印象に残ったし、感動しました。お店で売っていた家具やマスクも使いやすくて、デザインも良かったです。

この体験から私は障がい者は差別される存在ではないと思いました。今年は東京でパラリンピックが行われています。パラリンピックではいろんな障がいがある選手達が自分の個性や能力を生かして、みんなが平等に活躍することができる大会です。私は、パラリンピックを見て障がいのある人達が自分の特徴をハンデとはせずに、努力をして楽しそうにしていて感動しました。日本では、選手達がたくさんメダルを取っていてすごいと思いました。パラリンピックなどのように障がいのあ

る人達も健常者も協力し合って楽しめるようなことが増えて欲しいです。障がいのある人達は周りの人達に支えられながら生活していて、このことが当たり前になる世界になって欲しいです。確かに障がいのある人のお世話をすることはとても大変なことです。障がいのある人達のことをあまり良く思わない人もいるかもしれません。けれど、障がいのある人達のお世話をすることはけっして不幸ではありません。障がいのある人達もいろんな人達もみんなで助け合って、楽しむことも当たり前のことになって欲しいです。例えば、目が不自由な人が杖を使って点字ブロックの上を歩いている所を見たとします。そしたら「大丈夫ですか。」と声を掛けて、その人が「手伝って欲しいです。」などと言ったらその人の歩きの手伝いをします。このようにみんなで助け合うことが当たり前になって欲しいと思います。

　なので、障がい者は差別される存在ではないと私は考えます。